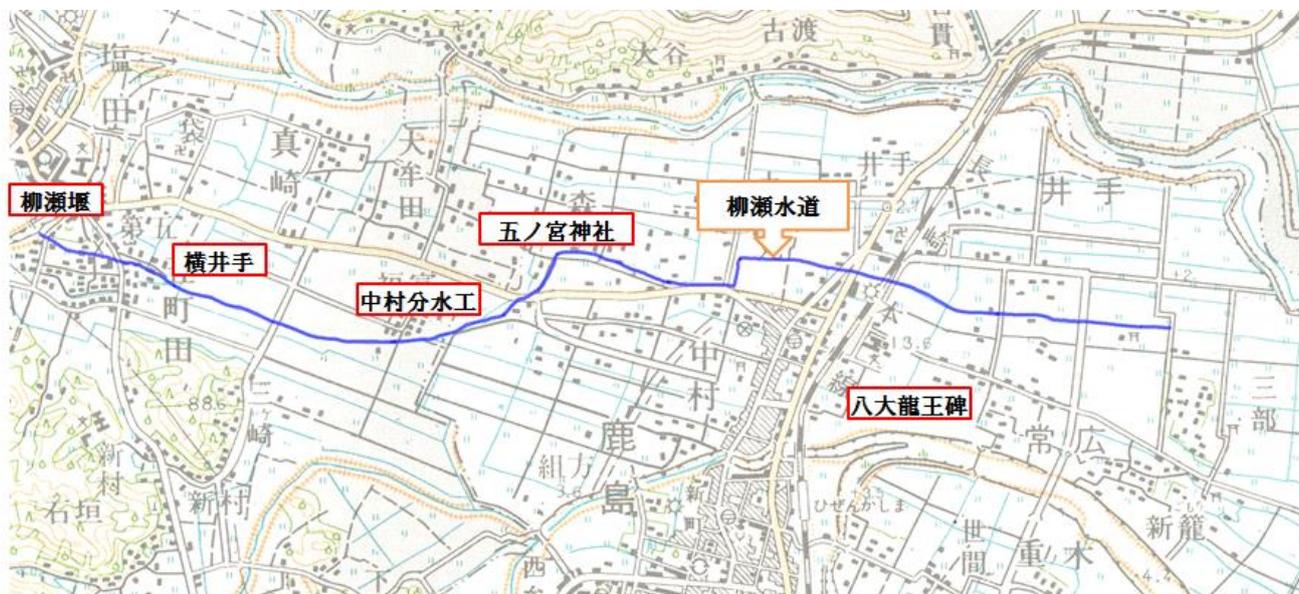


## 鹿島ふるさと探訪

～水でめぐる北鹿島～

平成 28 年 11 月 10 日

案内:高橋研一 (図書館学芸員)



当日の行程

### 《鹿島ふるさと探訪開催にあたって》

北鹿島地区は、東側を有明海、北側を塩田川、南側を鹿島川に囲まれています。目の前に潤沢に水がありますが、すべて海水が遡上してくるため、目の前の水を使いづらい、そういう状況の中で、北鹿島の人々がどのようにして水を確保しながらこの地域で生活してきたのかに主眼において、今日は北鹿島地区を回ってみたいと思います。



塩田川と水道

北鹿島地区で一番大事な水道が塩田川から取水する柳瀬 (やなぎせ) 水道です。現在では北鹿島幹線水路あるいは大溝と呼ばれています。この柳瀬水道が造られたのは江戸時代になってからです。それま

で北鹿島全体は湿地帯であって、滲み出してくる水を使いながら人々が生活を営んできました。江戸時代になって、鹿島藩や蓮池藩といった政治の単位ができてくる、そして農耕技術が上がってくるなかで、それまで水が滲み出していたところにも立派な堤防が造られます。そのため、水が潤沢だった地域が、むしろ水が不足する地域となってきます。鹿島藩と蓮池藩との間で様々な協議を経て造られたのが、日吉水道、それから柳瀬水道です。

水を確保すると同時に、水の災害から地域を守ることも非常に大事でした。現在は圃場整備で失われましたが、以前は鹿島市と嬉野市の境界に、長い土手(堤防)がありました。三ヶ崎の方からは三ヶ崎土手、森の方からは鼻繰(はなぐり)土手と呼ばれていました。それから、今のJR 長崎本線がある辺りにも長林土手がありました。こうした二重の土手によって、北鹿島地区は塩田川の決壊から守られてきました。同時にこれらの土手は、有明海の高潮から上流地域を守る役割も果たしました。

北鹿島地区の組方区と塩田の三ヶ崎の間にわずかに三ヶ崎土手が残っていますが、これは北鹿島の地域を守ってきた重要な防災遺構なのです。この三ヶ崎土手には、江戸時代に瓶井樋(かめいひ)が設けられていました。塩田が塩田川から取った水を鹿島川に“捨てる”だけとなった地点に設けられており、瓶井樋によって鹿島側に引き込まれた水は中村・常広方面に流れていました。

### 《柳瀬堰と柳瀬水道》

塩田川は非常に干満の差が大きいので、嬉野市役所あたりまで海水が遡上してきます。そのため、そこから下流域には水道を造ることができませんでした。柳瀬堰がギリギリ海水が混ざっていない水を確保することができる場所でした。

柳瀬堰で取水された柳瀬水道は福富、それから五ノ宮神社のほうに向かって流れています。柳瀬堰が造られたのは享保16年(1731)です。柳瀬堰があるのは塩田ですが、管理しているのは北鹿島になります。井手区をはじめとする北鹿島の方々が花立(はなだて)水道を遡って行って、塩田小学校のあたりまで、掃除に行かれています。



柳瀬堰

柳瀬堰の上流には日吉堰があります。日吉堰で取水される日吉水道は柳瀬水道より先に完成した水道で、北鹿島方面に向けて造られた最も古い水道です。柳瀬水道ができる前は、途中の五町田の横井手で、北鹿島方面と三ヶ崎方面へ分水されていました。

さらに、日吉堰の上流には関東堰がありました。関東堰で取水されて必要な水はそのまま塩田の町の中に流れていきます。そして、不要な分は花立水道を通り、塩田川に戻ってきます。花立水道の出口は柳瀬水道の引き込み口の対岸に設けられています。柳瀬堰では塩田川本流の水と花立水道を通過して塩田川に戻ってきた水、この2つの水を取水して、北鹿島方面に流していたのです。



「鹿島村水聖地」碑

左の写真は「鹿島村水聖地」という石碑です。正面の「鹿島村水聖地」は昭和13年(1938)に、鹿島村長愛野時一郎によって書かれています。側面には柳瀬水道の由来が刻まれています。戦前の北鹿島の人達は、人々の生活が成り立っているのが何故かをよくわかっていて、柳瀬水道の出発地点であるこの場所に石碑を建てたのです。

「鹿島村水聖地」の石碑に刻まれている文章は、柳瀬水道の由来を記した貴重な史料ですが、その内容は十分な検討が必要です。例えば、「柳瀬水道ハ享保三年鍋島直朝公ノ英断ニヨリ舊蓮池藩トノ協定ノ下ニ柳瀬井堰ヲ造リ」と記されています。享保3年(1718)に直朝が柳瀬水道を造ったと書かれています。直朝は宝永6年(1709)に亡くなっています。鹿島で「水」というと、直朝に結び付けないといけないということもあって、直朝による柳瀬水道建設という伝承が後世にできあがったのです。しかも、この文章が無批判に引用されていること

によって、誤った伝承が史実として定着してしまっただけです。享保3年に実際にあったことは、鹿島藩が蓮池藩と協力して水道を造りたいと頼んだけど結局失敗したという話です。だから享保3年にできたわけではないのです。実際にできたのは享保16年です。

日吉水道の水は途中で塩田の人々にも使われていますが、柳瀬水道は深く掘られているので、塩田の人々は一切使うことはできません。塩田の人々からすれば、早魃などの折に、自分たちも作物を作る場所が必要なのに、水道を造る分の幅をとられるわけです。そのため、塩田の人々からすると、自分たちの生活に一切役立たない水道は潰したいわけです。だから交渉もなかなかうまくいかない。鹿島のほうが、毎年これだけ納めるので、水道を造らせてくださいということで維持管理してきた水道になります。

北鹿島地区は、江戸時代に鹿島藩領だったところと、蓮池藩領だったところの2つの地域からなっています。井手と三部が蓮池藩領になります。それ以外の地域が鹿島藩領になります。そのため、水道が造られていく経緯でも、蓮池藩領だった井手、三部地区に水を送る名目で造られていくわけです。鹿島藩としては、井手、三部に流れ込んでいく水の取り分をより多くしようと、いろいろな理由をつけて交渉します。

ひとつ大きいポイントとしては、常広城の堀の水をどうやって溜めていくかというのがありました。城の水は国防や威厳の点からも非常に重要だったので、鹿島藩としては常広城の堀の水という名目で、塩田から水をより多くもらって、それを常広や新籠に流していました。途中で蓮池藩に気づかれて、蓮池藩の役人が水を流すたびに水がどこに流れていくのかとチェックするようになったので、それができなくなったようです。

## 《横井手と朝日坊》

ここが横井手という所で、北鹿島地区に関する最も重要な水道施設です。塩田川の方を向いて、左手から流れてくるのが日吉水道、右手から流れてくるのが柳瀬水道です。

昔は日吉水道しかありませんでした。そのため、日吉水道の途中に横井手を設け、三ヶ崎方面に行く水と森・井手方面に行く水を分けていました。その後、柳瀬水道ができると、基本的に横井手は使われ

ていません。ただ柳瀬堰が使えなくなる事態が生じると、柳瀬水道には水が入ってこないで、日吉で取った水を分ける重要な設備として現在も維持・管理されているのです。

ここでは両水道の高低差がよくわかると思います。柳瀬水道は深く造ってあるので、ここの地域の人は水を使うことはできないのです。この地域で対岸の田を作るためには、横井手から分水された日吉の水を使います。そのため、水が立体交差する場所がいくつかあったと書かれています。

柳瀬水道は朝日坊というお寺の傍らを通って、横井手に至ります。朝日坊は八天神社の社坊のひとつでした。江戸時代、水門や水道の改修等の際、鹿島藩と蓮池藩は互いに自分の都合の良い書類を出し合います。どちらの証文が正しいかを照合する場所が朝日坊でした。互いに神仏の前に自分の証文を持って行って、自分はこの寸法で聞いている、私はこの寸法で聞いているということを確認め合い、ではこの寸法で造りましょう、と。そしてそれを違えないことを、神仏の前で誓約するわけです。

このように、横井手と朝日坊は、塩田川の水利上で非常に重要な場所だったので。



横井手

## 《分土工》

柳瀬水道は塩田町域では一切分岐することなく、北鹿島に至ります。そして、北鹿島に入ると、北鹿島各地区に水が行き渡るように分岐を繰り返します。水を分岐させる仕組みが分土工になります。

中村にあるこの分土工では、井手区方面に向かう柳瀬水道(幹線水路)、森区に向かう水路(森溝)、中村区に向かう水路(中村溝)、中村区・組方区に向かう水路(九竜溝)の4つに水を分けています。

北鹿島の各地区が必要とする水の量に応じて、取水口の幅を調整しながら、水を分けあってきました。この配分率みたいなものがどのように決められたのかは非常に重要ですが、現段階ではまだ分かっていません。ただ、分土工が同じ水道によって命を繋ぐ人々の知恵と工夫を現在に伝える貴重な土木遺産であることは感じていただけるのではないかと思います。

水をどう分配するのかは当時の人が一番知恵と工夫を凝らしたところですが、こういったものは地域にとって一番重要であって、機微に関わる部分なので、口頭で伝えられてきました。文字で残すとそれが証文になるので、文字としてあなたは何%というような証文にはなっていません。慣習という形で伝わっています。現在の「区」は江戸時代の「村」です。井手村が井手区になり、常広村が常広区になっています。

今もなぜ「区」を存続させる必要があるかという、水利を含めて慣習の担い手だったのは「村」だったからです。そして、「村」(「区」)で積み上げてきた慣習があり、そこに依拠しないと地域社会が成り立っていかないからです。



分土工

## 《五ノ宮神社》

北鹿島に入った柳瀬水道は緩やかに曲がり、五ノ宮神社に向かっていきます。五ノ宮神社は北鹿島の鎮守社で、北鹿島で最も重要な神社になります。五ノ宮神社の境内に入る直前の場所に、「北鹿島用水路記念碑」が建てられています。これは昭和30年代に行われた北鹿島地区の用水路の改修工事が終わった記念碑になります。大分磨耗が進んでいるのですが、その時の経緯が碑文に記されています。

現在は使われていないのですが、五ノ宮神社の庭園にはかつて柳瀬水道の水が廻っていました。鹿島近辺では、琴路神社がそういう形態になっています。琴路神社は能古見地区にある三嶽神社の下宮として創建されました。かつて中川は上宮の三嶽神社、中宮の琴路(ことじ)宮、下宮の琴路神社、そして現在の神水川を通して、有明海に流れ込んでいました。

水が神社に入って、神様の水として地域に流れて行く。柳瀬水道の場合も、わざわざ五ノ宮神社に一度入れて、それを地域に戻しています。そういう意味では、地域の水の神様としての性格を色濃く持っていた神社だったのです。

五ノ宮というのは、一ノ宮、二ノ宮、三ノ宮、四ノ宮があつて五ノ宮になります。塩田の丹生神社が一ノ宮です。五ノ宮神社も丹生五ノ宮と記されていました。ただ、江戸時代に入って、蓮池藩領にある丹生神社が本社で、鹿島藩領にある五ノ宮神社がその末社であることは、鹿島が塩田の下に位置付けられてしまうため、鹿島の人々が嫌がるようになります。鹿島藩の4代藩主鍋島直條は「五ノ宮」を「護宮」という表記に改め、丹生神社から独立した新しい縁起を造り出しました。しかし、定着することなく、自然と五ノ宮に戻っていきます。

北鹿島地区と塩田町域はもともと塩田郷としてまとまっております、一ノ宮から五ノ宮までつながった地域だったのです。それが江戸時代に藩ができたことによって、政治的に分断されてしまいます。鹿島藩になった村々は鹿島郷として、塩田郷から独立します。塩田郷に残った井手・三部は江戸時代を通じて丹生神社に祭礼に行っています。五ノ宮神社は鹿島郷の鎮守社だったのであり、明治時代に村社となったときに、井手・三部が入って、今の形の北鹿島全体の鎮守社となったのです。

現在、佐賀方面に向かう時は百貫橋を利用していますが、江戸時代、百貫橋は蓮池藩領だったため、鹿島藩主としては蓮池領を通らず、なるべく自領を通ろうとします。そのため、百貫の上流にある古渡で塩田川を渡っていました。居城であった常広城を出て、本町を通った殿様が古渡に向かう際に、柳瀬水道を渡った場所が殿の橋になります。

## 《柳瀬水道の終点》

柳瀬水道はJR長崎本線をくぐると、比較的直線となり、有明海に向けて走っています。江戸時代の絵図をみると、折れ曲がりながら走っており、昭和後期の圃場整備によって、現在の形になりました。柳瀬水道は北鹿島に入ると、北鹿島幹線水路、大溝と呼ばれます。中村の分水工と比べると、水量が少なくなり、浅くなっています。

水路の重要性が必ずしも大きさに比例するわけではありません。北鹿島にはいくつも水路があります。柳瀬水道より広く深い水路がありますが、一番大事な水路は柳瀬水道です。地域の方々の話だと、馬の

背のように北鹿島の中でも高くなっていて、自然と左右に水が分かれていく場所に柳瀬水道が通っているという話でした。

柳瀬水道の終点は、地域の方が“トリカゴ”と呼んでいる地点です。ここから先、三部方面に水が流れていくのですが、ここから先は幹線水路とは言わないようです。塩田川の柳瀬堰で取水した水が幹線水路として辿り着く最後の場所がここになります。



“トリカゴ”

“トリカゴ”で向きを変えた水路は三部区に向います。三部区の南には新籠区があります。江戸時代、三部区は蓮池藩、新籠区は鹿島藩に属していました。三部区と新籠区の境界は、かつて蓮池藩と鹿島藩の境界だったのです。三部区の水路は新籠区につながらず、そのまま有明海に排水していました。

そのため、新籠区は必要な水を鹿島川の対岸にある鹿島地区から確保していました。末光に水源地があり、世間区に入り、鹿島川の下をくぐって、常広区に入ってくる水道は迎(向井)水道と呼ばれていました。

#### 《常広区の八大龍王神社碑》

この八大龍王神社はかつて鹿島川の堤防付近に祀られていました。大正3年(1914)に北鹿島地区は大規模な高潮に見舞われ、大きな被害を受けました。八大龍王神社碑も高潮によって流されてしまいました。常広区の人たちが再建をしたのがこの石碑です。そして耕地整理のときに堤防沿いから現在の場所に移ってきました。

北鹿島地区は、度重なる水害や高潮の被害を受けてきています。しかし、地域の中で災害があったことを石に刻んだものはありません。この八大龍王神社碑が唯一、大正3年に高潮があったことを物語っています。

東日本大震災の後に、どういう形で震災の記憶を地域に伝えていくかが課題になっています。北鹿島地区の場合は、残念ながらこれしかないのです。そういう意味では、北鹿島地域の災害伝承遺構として非常に大事な石碑になっています。

※ ( ) 内の読み方は、現在、地域での呼称です。



八大龍王神社碑